

1. はじめに

山アテ行為を用いる漁師達は、陸地景の重なり具合や離れ具合といった特徴的一瞬や継起的变化を丹念に見分けている。こうした船上からの視体験を読み解くことは、新たな視点場の発見や地景への見方を提供するという観点において、現代の景観体験にも十分展開可能である。

そこで本研究は、従来問われることがなかった船上からの景観体験、特に山アテ行為^①に焦点をあて、以下の三点を明らかにする。①漁業活動における山アテ行為の機能と利用動機を明らかにする。②船上からの陸地景認識の特性（どのような陸地景に対し、どのような呼称を付与し、そこには如何なる認識体系があるのか）を明らかにする。③景観計画の為の基礎的知見を収集する。

2. 研究の方法と調査対象地の概要

調査内容は主に、漁業の現況や漁法、山アテに関する知識を収集する聴取調査と、一人の漁業者が日々の漁業活動で如何に山アテ行為を運用しているのかを聴き取る個体追跡調査を行った。調査対象地は、予備調査において漁民の山アテ行為が確認できたこと、また各種地図、文献がそろっていることを理由に、琵琶湖中の沖島（滋賀県近江八幡市沖島町）を選定した。

3. 漁業活動と山アテ行為

3-1. 山アテ行為の利用実態

本項では、漁業者への個体追跡調査を通して、実際の漁業活動における山アテ行為の役割を明らかにする。著者は、平成11年10月1日から10月30日まで、ゴリ漁を行う漁師を対象に個体追跡調査を行った。この調査結果から、水上での漁業活動における山アテ行為の役割を、以下の4点導き出した。

- ① 湖底の地形や障害物の位置を水面上で正確に把握する『水上での一点測定』としての機能がある。
- ② 水上での移動の際、自船から岸までの距離を判断する『移動距離の確認の為の指標』としての機能がある。
- ③ 漁業者が水上での移動の際、見通し線が『移動の為の経路』として機能している。
- ④ 二本の見通し線の交点が、変化の乏しい水上での『局所的な認識単位』としての機能をもっている。

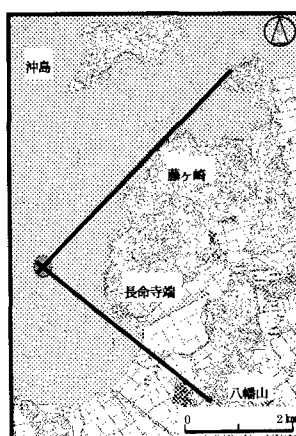


図-1>水上での一点定位

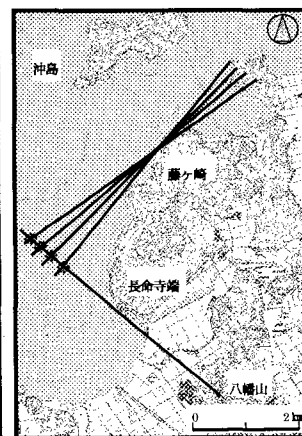


図-2>移動距離の確認



図-3>移動の経路

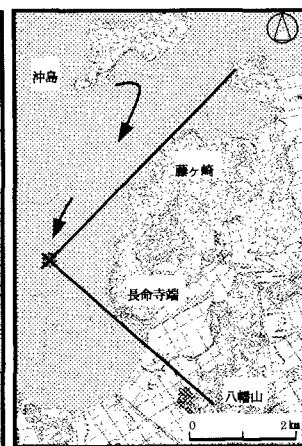


図-4>局所的な認識単位

3-2. 水面下の状況を検索する動機

漁業活動中に、山アテ行為を用いて水面下の状況を確認する動機は以下の3点あることが分かった。

- ①湖底地形が急傾斜している地点「瀬ガタ」や周囲より窪んでいる所「ツボ」といった『水底の地形形状の確認』、
- ②沈船や暗岩、岩礁といった『漁業活動上の障害物の確認』、
- ③「砂地」や「泥地」、「コスジ（泥と砂の混じった地点）」といった『湖底の底質の確認』



図-5>水面下の状況を検索する動機

4、陸地景認識に関する一考察

一連のアテ呼称の分析を踏まえ、本項では、漁業者の陸地景認識体系、つまり、彼らはどのような陸地景にどのような呼称を付与し、そこには如何なる認識体系があるのかを明らかにする。

アテ呼称を手がかりに、漁業者の陸地景認識を解明していく過程で、「陸地景の形状」と「呼称の付与行為」の間には、根本的な関連があることが分かる。

「山」型には、「判方」「ボンザン」のように「相似的連想に基づく呼称」が付与されていることが多いのに対し、「崎」型には、「藤ヶ崎」「蜷ヶ崎」のように「その地点の出来事・故縁などに基づく呼称」が付与されている。

これは、「崎」が、船上からどれも同じように見えることに原因がある。対象物が同じように見えるのであれば、その地点固有の相似的知覚がしにくい。したがって、呼称命名の契機を、その周辺で行われている事柄<コト>によっているのである。まとめると、下表になる。

表-1>「陸地景の形状」と「付与呼称」との関連

	「山」型	「崎」型
形状	形状が富む	形状が一様
示差特徴	示差しやすい	示差しにくい
連想	連想が容易	連想が困難
呼称	相似的連想に基づく	出来事・故縁に基づく
変化	「もの」化	「こと」化

	「山」型	「崎」型
例		
	<頭山>	<蜷ヶ崎>
	<ボンザン山>	<長命寺端>
呼称	ボンザン、テジヨウ山、頭山	藤ヶ崎、蜷ヶ崎、鯉ヶ崎など
特徴	対象への相貌的連想	その地点の出来事・故縁
変化	「もの」化	「こと」化

図-6>陸地景に対する付与呼称の違い

5、景観計画への示唆

船上からの景観体験に立脚した景観計画の為の基礎的な知見をまとめると、以下ようになる。

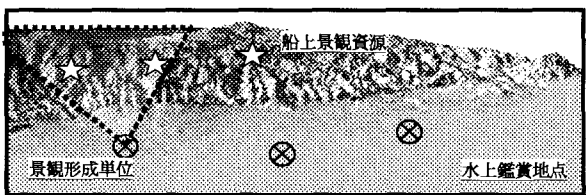


図-7>船上景観体験に基づいた景観計画の考え方

船上景観体験に対応した景観計画の考え方として、相似的連想や稜線の具合が見て取れる地点などを「海上鑑賞地」として設定可能である。また、船上からの眺望範囲である海岸から背後の山並みまでを一つの「景観形成単位」として捉える必要がある。そのなかでも、相似的連想を志向さず地形・地名の保全は重要である。

6、おわりに

本研究は、船上での重要な視体験である山アテ行為に着目した認識論的研究であり、以下の三点を明らかにした。①漁業活動における山アテ行為の機能を四点と、山アテ行為を用いて水面下の状況を判断する動機を三点明らかにした。②透視形態の違いによる付与呼称の変化を明らかにし、その理由が「透視形態の示差的特徴がもたらす相似的連想の難易差」であることを導き出した。③景観計画の為の基礎的な知見を収集した。

<参考文献>

(1) 桜田勝徳 (1968) 「漁撈の伝統」、岩崎美術社。五十嵐忠孝 (1977)、「トカラ列島漁民の“ヤマアテ”」(渡辺仁編「生態」)、雄山閣出版 他
(2) 丸山圭三郎 (1983)、「リシュルを読む」、岩波ジュニア新書、ベル・マガズ著、佐藤真理人他訳 (1994)、「ファッパ現象学入門」、文化書房 他

つまり、「山」型の透視形態は、呼称に「もの」が表現され、「崎」型のそれには、「こと」が示される。<図6>ではなぜ、こうした原理が成り立つのであろうか。むしろ、崎に比べて山は、総じて船上から遠景距離にある為、その地点から派生する故縁を付与することは難しい。そのため、対象の形態を根拠にした相似的連想に依らなければならぬと考えられる。しかし、それ以外にも理由がある。

◇透視形態の示差的特徴がもたらす相似的連想の難易差

<図-6>の「山」型は、どちらも比較的容易に識別できる。これは、総じて山頂付近は、さまざまな形姿をしており、示差しやすいからである。陸地景の形状差が顕著である場合、そこから連想される様々な物<モノ>を容易に当てはめることが出来る。

一方、<図-6>の「崎」相互の識別は、極めて難しい。